



無歯顎補綴の臨床的ガイドライン

佐藤 幸司

無歯顎補綴の製作で大切なことは、客観的なガイドラインとなる臨床深堀が重要と考えております。デジタル時代の歯科補綴学のなかで、無歯顎者の総義歯製作は生体に調和した客観的な術式と科学的な根拠に基づいた総義歯の設計概念が必要となります。

無歯顎治療の補綴は歯科学における学際的 (Interdisciplinary) な人工臓器治療が求められ、総義歯製作において、日本老年歯科医学会が提唱している口腔機能低下症 (保険病名) 患者の口腔緩和医療を考慮した解剖学を学ぶことが重要であると考えます。

全ての補綴装置には形態と機能を備えており、両者は密接不離の関係であります。口腔の形態を学ぶ学問が形態学、すなわち解剖学であり、機能を追求する学問が機能学すなわち生理学である。

アナログデンチャー・デジタルデンチャーの製作技工に際しても押さえておかなければならない各ステップを整理し、より客観的なガイドラインを応用することが重要であります。

日常臨床の義歯製作において肉眼的解剖学を観察することにより、臨床学的視点から解剖学的考察により生理学および力学的に解り易く考察した人工歯排列を行うことが望ましいと思われれます。総義歯の製作は自然科学を採求する学問であり、生体に調和した口腔機能の回復が目的であります。そのために、総義歯を構成する各臓器を考察し、義歯の機能を構成する印象体には、(Adhesion粘着: Cohesion吸着) が求められる。義歯の咬合には、人工歯排列ゾーン・異なる症例に対する咬合様式の付与が重要になる。義歯の生理学的軸面となる研磨面は、(デンチャースペース・ニュートラルゾーン) を応用した客観的な歯肉形成の軸面形態を付与することが大切になります。

また、患者固有の生理学的な咬合調整を行う事で口腔内装着時、違和感の少ない義歯を装着することが出来ると考えます。そのうえで、長期予後に対する考察も重要な項目であります。

愛知県歯科医学大会歯科技工士企画講演では、臨床症例に応じた義歯製作を考察し、総義歯臨床で押さえておきたい項目と歯冠修復技工にも応用できるガイドラインについて考察する予定です。

時間が許せばデジタルデンチャーについて考察出来れば幸いです。